

マルクス再び

日
朝新聞
05 (H7)
7. 22

集中を始め、自国の論理を世界に押し広げようとする米国への不安や、大量の「負け組」を生み出すグローバル化した資本主義に対抗する論理を求めようとの意識もあるようだ。(池田洋一郎)

ソ連邦の崩壊後、忘れ去られた観もあったマルクスが、今また読まれつつある。主要著作の新訳シリーズが刊行されて増刷を重ね、関連書の出版も相次いでいる。背景には、9・11テロ以降、一極

強大化した米国・単独主義への対抗軸に

1月から刊行の始まった「マルクス・コレクション全7巻」(筑摩書房)。マルクスの主要な著作を平易に訳し直した新シリーズだ。すでに4冊が出ているが、『資本論 第一巻上・下2冊は増刷され各5千部。他の巻も各4千部で、「硬い本」としては、かなり手応えがいい(同社)。訳者の一人、今村仁司・東京経済大教授は「戦前からの硬い翻訳がずっと続いてきた。今回は基本用語も一部変え、すらすら読めるようにした」という。関連本も相次ぐ。昨年出版された的場昭弘・神奈川大教授の『マルクスを再読する』(五月書房)は6千部、『マルクスだったらこう考える』(光文社新書)は3万2千部。今村氏がこの5月に出した『マルクス入門』(ちくま新書)も2万部に達する。いずれも好調で、中高年から若者まで読者は幅広いと版元はいう。

9・11以降

なぜ、いまマルクスなのか。的場氏は「90年代後半、デフレスパイラルといった言葉がはやり、世界恐慌の可能性などが論

議になった頃にも、マルクスが顧みられたが、今回は少し違う」という。「9・11テロ以降、強大化した米国が単独行動主義を強め、刃向かう者は容赦しない」という、いわば『帝国』のような振る舞いに、多くの人が危機感を抱き、対抗軸をマルクスに

新訳・関連本続々と

求めようとしている」とみる。さらに、「マルクスの体系は世界中に資本主義が行き渡る時代を前提にしているが、現在のグローバル経済こそまさにそれ。マルクス理論の有効性が見直されてきた」という。冷戦の終結により、世界全体



出版が相次ぐマルクスの新訳や関連本



今村仁司氏



的場昭弘氏



間宮陽介氏

を資本主義システムが包括するグローバル化の時代が到来した。貪欲な資本はうむことなく利益を追求し、国家の枠を飛び越える。安い労働力を求めて国境を越え工場を移し、自国内でも低賃金の移民労働者を使う。「先進国、途上国を問わず、世界規模で国民が富裕層の勝ち組と貧困層の負け組の両極に分解している。賃金の低下、失業者の増大、就職難など社会不安が広がりがつつある。マルクスのいう階級構造が目に見える形になってきた」

斬新な視点

今村氏も「資本主義経済の基礎的構造を理解する場合、最も信頼できる理論と思想はマルクスという。マルクスは、商品、

労働、貨幣など資本主義を根源的に分析し、資本が社会を覆い、その運動原理が人間の思考や行動をも規制している構造を解明した。「共同社会の建設や民族対立、階層分化、貧富の格差などをどう考えるべきか、斬新な視点がマルクスにはつまっている」と語る。

読み方にも変化があるようだ。間宮陽介・京都大教授は、「社会主義圏の崩壊で、政治的イデオロギーがはぎ取られて、しがらみなくマルクスが読めるようになった」という。

「かつてはマルクスは一つとして、正統的解釈を競った。しかし、もともとマルクスは間口が広く、政治や経済、人間論や権力論としても読める。今はいろんな読み方が可能になり、いくつものマルクス、多数のマルクスがあり得る。環境問題や貧富の差の拡大、文明の衝突など個々の読者が自らの関心を起点に、主体的に読み込もうとしているのではないか」

60年代後半に繰り広げられた人間の疎外をめぐる議論など、これまでもしばしばマルクスはその時々の社会の現状批判のよりどころとして論じられてきた。グローバル化が進み、混迷を深める現在の世界に、果たしてマルクスはどのような解答をもたらすのだろうか。